

設楽町分科会

10/12(金)

つぐグリーンプラザ 多目的ホール

挨拶

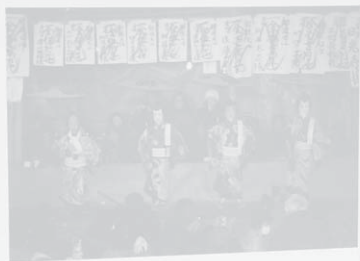
設楽町長

過疎地域自立活性化優良事例発表

群馬県／神流マウンテンラン&ウォーク実行委員会

愛知県／田峰観音奉納歌舞伎 谷高座

田峰観音奉納歌舞伎

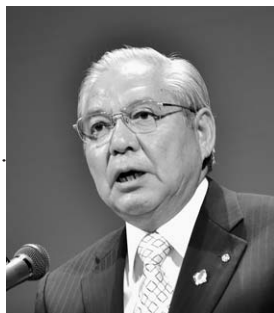


設楽町長

横山 光明

よこやま

みつあき



皆さんおはようございます。ご紹介いただきました設楽町長の横山でございます。設楽町分科会をここ設楽町で開催するにあたりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は公私ともお忙しい中を、多くの皆様方にご参加をいただきまして、大変ありがたく思っております。また、こうしてここ設楽町まで遠路はるばるお越しいただいた皆様方、心から歓迎を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

この分科会におきましては、事例発表ですとか、ま



たパネルディスカッションを通じまして過疎地域が抱える課題を皆様と一緒に改めて確認をするとともに、課題解決に向けた、さまざまな取組と、今後に取り組むべき方向性について、そのお考え等をお聞かせ願えればと考えておるところでございます。

さて、本町の立地でございますが、愛知県の北東部に位置しております。北側は長野県根羽村に接しております。また、西は愛知県豊田市に接しておるところでございます。この地方をご存知ない方には、愛知県に過疎ということをお聞きになられて、ピンとこない方もおいでになるのではないかと思います。しかし本日、ここ設楽町の津具地区までおいでいただく中で、車中からご覧になりましたとおり、山の一部開けた地域に集落が点在するという、日本中で見かける典型的な中山間地域でもあります。こうした中にありまして、私どもの抱える問題も、農林業の衰退、そして後継者不足、さらには若者の流出、そして救急ですとか医療体制への不安、公共インフラ他の不効率化など、多くの過疎地域が抱えております問題と同様な思い、悩みがありまして、自治体におけます過疎対策の取組につきましても、少しでも良い取組、良い方法があればということで、日々参考にさせていただきたいと思っているところでもあります。

本日の分科会におきまして、皆様方にとりましても、私どもにとりましても、今後につながるようなきっかけとなることを、期待とご祈念を申し上げまして、私の御挨拶とさせていただきます。

本日はよろしく願いいたします。ありがとうございました。

群馬県神流町 | 神流マウンテンラン&ウォーク実行委員会

少子高齢化日本一の町が創った、 日本一のトレイルランニングレース

神流マウンテンラン&ウォーク実行委員会事務局 黒澤 祐哉

群馬県神流町より参りました神流マウンテンラン&ウォーク実行委員会事務局の黒澤と申します。このたびはこのように素晴らしい表彰をいただきまして、お世話になりました関係者の皆様にこの場をお借りいたしまして、厚く御礼を申し上げます。

さて、これから、私どもの行っております「神流マウンテンラン&ウォーク」につきまして事例発表をさせていただきます。この事業は、大変多くの町民の方に関わっていただきまして、また大変な苦勞をしていただいております。今日発表させていただくのは、時間の都合もありますので、その中の一部となってしまいますけれども、詳細の方をこれから話をさせていただきます。

それでは、まず「神流マウンテンラン&ウォーク」の事例を発表させていただく前に、神流町の紹介を少しさせていただきますと思います。神流町は群馬県の南西部に位置しておりまして、総面積が114.69平方キロメートル、人口が2,360人という小さな町であります。また、林野面積につきましても町の総面積の88%を占めておりまして、町の中央部を「関東一の清流」とも言われる神流川が流れる自然豊かな町であります。しかしその反面、四方を急峻な山々に囲まれておりまして、各産業とも大規模な事業展開というものができません。そのため、若者の人口流出にも拍車がかかりまして、現在では高齢者比率の方が52%ということで、町民の半数以上は高齢者ということになっております。この二つが、町が抱えている問題でございます。

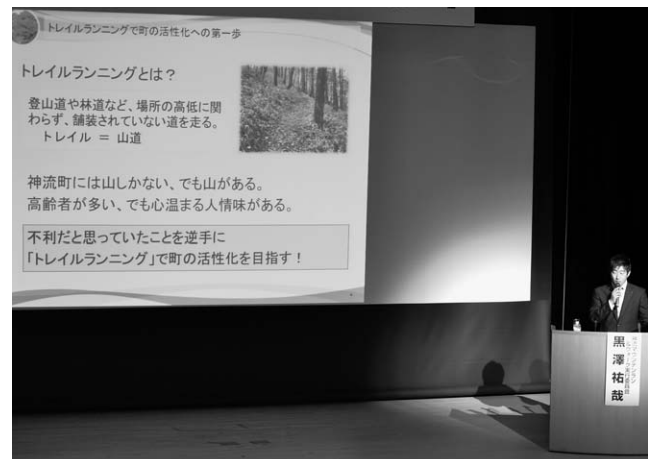
先日、国立社会保障人口問題研究所というところが発表しました「将来推測人口」というものと、2025年には神流町の高齢者比率が日本一になってしまうということも推測をされております。このような状況下に置かれましても、地域に活力が生まれる活性化策を模索しておりまして、町民が生きがいを持って暮らせるような町づくりというものを目指しておりました。

そんな中、2009年の2月に、当時、群馬県庁職員で、本大会のプロデューサーを務めていただいております鍋木毅さんと、群馬県の行政事務所の職員の方が来町

していただきまして、トレイルランニングというものを提案していただいたことが「神流マウンテンラン&ウォーク」の始まるきっかけとなりました。鍋木毅さんについてですけれども、群馬県庁に就職されまして、在職中も数々のレースに出場されておりました。国内の主要大会でも数々優勝されまして、2009年4月からプロのトレイルランナーとして世界でも活躍しております。また、2011年にはスポーツ観光マイスターということで観光庁より任命されまして、レース以外でも幅広く活躍をされております。

トレイルランニングというものを提案していただいたんですけれども、そもそも私たちがトレイルランニングという言葉を知るのは初めてだったので、トレイルランニングというものはなんだろうということで、何もわからない状態でありました。しかし話を伺ってみますと、トレイルとは山道を意味しておりまして、トレイルランニングは登山道とか林道といった舗装されていない道を走るスポーツということがわかりました。はじめに神流町の紹介でお話させていただいたんですが、急峻な地形を利用したもので、町の抱える課題をクリアできるんじゃないかということで、不利だと思っていたことを逆手に取って町の活性化ができるのではないかとということで、トレイルランニングで町の活性化を目指すこととなりました。

トレイルランニングとはどのようなスポーツか、ということは理解できたんですけれども、なんの知識もない私達でしたので、これを大会にするためには非常に多くのものを検討しなくてははいけません。そのため、町民の方にも、トレイルランニングというものを知ってもらうことから始めまして、実行委員長に神流町長、プロデューサーに鍋木毅さんを迎えまして、あと17団体の地域団体が参加する実行委員会を発足させました。何も



わからない状態ではあったのですが、神流町のオリジナルの大会を作り上げるために、連日会議を開催しまして、詳細について検討していきました。いろいろ町民の方も神流町らしさというものを前面に押し出し、さまざまなアイデアを出していただきまして、「神流マウンテンラン&ウォーク」の基本構想というものが完成しました。その中でも特徴的な取組について、この後、説明をさせていただきます。

第一回大会に向けていろいろ準備を始めておりまして、いよいよ第一回大会の開催というところまで行っただけですが、その大会開始の5日前に、群馬県警の警察本部から大会を中止するようという指導を受けてしまいました。というのは、第一回開催の開催日は11月15日ということで、ちょうど狩猟の解禁日なんです。実行委員会の方としても、狩猟の解禁日と重なるということは承知して、県の猟友会とかそういったところに、いろいろお話をして対策は講じていたんですけども、これらの対策を踏まえたうえでも、選手やスタッフの安全面を考慮して大会を中止するよう、ということで求められてしまいました。

それから、臨時の実行委員会を連日開催しまして協議したんですけども、大会直前ということもありまして、今まで準備してきたことがすべて無駄になってしまうわけなので、大会を決行するにせよ、中止にするにせよ、非常に難しい決断でありました。しかし、いろいろ話した結果、大きな責任を伴うんですけども、安全対策をさらに強化して実施するというので、実行委員会として決断をいたしました。その狩猟解禁とか、選手に改めてひとりひとり電話連絡をしたり、真夜中に山の中に看板を設置したり、大会当日にセスナ機で注意を呼び掛けるというようなことを行いまして、絶対に大会で事故を起こさせないという強い決意のもとでさまざまな対策を講じまして、実施することといたしました。大会数日前ということで非常に大変な出来事ではあったんですけども、この一件で、より町民の方が強くまとまりまして、何が何でもこの大会を絶対に成功させる、ということで町民一丸となって作っていくイベントに発展をしていきました。これスタートの写真ですけども、こうして平成21年11月15日に記念すべき第一回大会が開催されました。

それでは、先程お話をさせていただきました特徴的な取組について、ご説明をさせていただきます。今回、7つの項目についてお話をさせていただきます。

まず、トレイルランニングに欠かすことができないものは「コースの選定と整備」ということです。長距離の山道を周回コースとして使用するんですけども、何しろ私たちも、山の状況というものがどういふふうになっているのか分からないので、地元の高齢者とかに古道、古道を聞きまして、本当に何日も何日も、山に入って、コースを繋いでいって作っていったという形になっております。古道といっても、普段やはり使われていない道ですので、ご覧いただいている写真のように、倒木とか崩落とかひどい箇所があったりしまして、とても走れるような状況ではないところもあります。また植物は、希少な植物とかもありますので、自然保護団体と協議して、助言をいただきながら、うまくコース設定をしていきました。

コースが決まりましたら、続いてコース整備になるんですけども、こちらについても町内外から多くのボランティアの方が参加していただきまして、この大会に使えるコースということで整備をしていただきました。コースができたことによりまして、山道が整備できたわけなので、大会以外にもハイキングコースということで、町の方でもPRができるようになりました。山歩きのガイドマップなんか新しく作ったりしております。

続いて、今、大会と併せて非常に人気になっているのがウェルカムパーティーですけども、選手を迎え入れて歓迎したいということで、大会前夜に開催しております。こちら、地元の郷土料理をふるまって皆様に提供しております。ご覧いただいている写真は作業の様子ですけども、お酒につきましても手作りの竹コップだったり、竹とっくりだったり、イワナの骨酒ということで料理以外にも飲み物についても、神流らしさを追究して提供しております。これがウェルカムパーティーの様子でございます。これ、去年の写真ですけども、現在では会場に入りきれないほどウェルカムパーティーに参加したいという方が多くいらっしゃいます。

続いて宿泊についてですけども、遠方から来られる方もいらっしゃいますので、もちろん宿泊される方もいらっしゃるんですけども、ウェルカムパーティーに参加したいために、近県からでも来られる方もいらっしゃいまして、第三回大会では参加者のうち80%ぐらいは宿泊をされました。ただうちの町には、宿泊施設というものが町営施設と、あと旅館・民宿が3軒しかございません。これにつきましても参加者の方をいかに受け入れるかということで、町民の方から提案をいただきまし

て、町民のお宅に宿泊する「民泊制度」というものを導入したらどうかということで、町民のお宅に宿泊させていただくことになりました。導入したことによりまして、選手の方と町民の方とのふれあいというもの生まれまして、大会以外にもイベントとか、試走という形で試し走りされる方もいらっしゃるんですが、そうって来町されたとき言葉を交わすなど、新たな交流人口なども生まれております。

続いて、選手に配布する参加賞についてですが、これも神流町らしさということで、手作りにこだわって作成しております。今ご覧いただいているのは押し花の葉です。こちらは木製のネームプレートですが、ナツツバキ、シャラノキともいわれている木材を使用しているんですが、これも町民の方から頂いて作っております。この焼印も町民の方の提案で作っていただきまして、手彫りの焼印を使用しております。これ、一枚一枚、焼印を押しております。選手の方に配布するので選手の名前を一人一人書き入れまして、参加賞ということで配布させていただいております。参加賞、非常に時間のかかる作業ですが、町民の方は「記念になれば」ということで、気持ちを込めて作らせていただいております。

続いてこれが、「1,000かんな」という地域振興券を作成しているんですが、参加費の中から、料金をいただいて、1,000円分を選手の方にキャッシュバックしております。「神流マウンテンラン&ウォーク」の最大の目的ですが、地域活性化ということが目標でありますので、極力、町内で買い物をしていただくということで、考案をさせていただきました。これ、第三回の実績ですが、総支出経費のうち、68%くらいは町内の方に支払いをされております。その中で、地域限定チケットということで、60万円くらいが商店等で使用されておりますので、この「1,000かんな」という効果は非常に大きいのではないかなというふうに思っております。

続いて本大会のゴールゲートですが、これも空気を入れるドーム型のゴールゲートを使えば簡単ですが、手間がかかっても杉の葉を使ったゴールゲートを使いたいということで、作っております。これ、杉のゴールゲートを作るのに、葉っぱを集めていっているところです。これも、ゴールゲートを作っている最中ですが、町民の方の設計によりまして、うまく杉の葉が付くように作業をしております。



続いて、コース上には全5ヶ所のエイドステーションという一選手の休憩所です—があるんですが、そこでも地元の物を使ったものを提供しております。今ご覧いただいている写真が、標高1,000メートルのところに位置しております持倉（もちぐら）集落のエイドの写真ですが、この集落は、人口は12人、高齢者比率100%ということで、いわゆる限界集落でございます。ただ、そこのおじいちゃんおばあちゃんたちは、その畑で作りまして採れたものを、手打ちそばだったり、花豆という豆があるんですがそういったものを選手全員に配られまして、何杯もそばを食べられる方もいらっしゃいます。

続いて、完走証ですが、本大会は手作業による計測を行っております。万が一に備えて、タイムが計られなかったりとかする場合がございますので、選手のゴールの瞬間をすべて確認用として写真で収めておりました。せっかく写真を撮るんだったら、完走証に使うてみてはどうかということで提案がありまして、今ではゴールした瞬間の写真つきの完走証というものを選手の方に発行しております。

他にもいろいろ事例はあるんですが、こうしてボランティアスタッフ400名、あと応援とか含めると町民総出と言っても過言ではないほど、町全体で大会を運営しております。また大会以外にも大規模な試走会とか、清掃登山ということで山のゴミ拾いをしていただくような団体もおりまして、こういった新たな交流人口なんかも生まれております。

以上、ちょっと大雑把ではあったんですが、「神流マウンテンラン&ウォーク」の始まりからお話をさせていただきました。すいません、時間の都合もあって早口で説明をさせていただいてしまったんですが、ここでちょっと5分程度のビデオをご覧いただきたいと思いま

す。

(ビデオ放映)

はい、すいません、ありがとうございました。

今、ご覧いただきましたけれども、「神流マウンテンラン&ウォーク」というものがどういうものかを、イメージしていただけたらと思います。

最後になりますけれども、今「神流マウンテンラン&ウォーク」を通じて、ここに書かせていただいているようなことを感じる事ができたんですけれども、高齢者

は高齢者なりの、男性は男性なり、女性は女性なりの、それぞれ得意分野を生かした形で大会に関わることができたということが、素晴らしいことだなというふうに思います。ひとりひとりができることを実行すれば、神流町への誇りというものと、元気を持つ、活力ある町へとつながりまして、最大の目標である地域活性化につながっていくのだと思います。

今後も「神流マウンテンラン&ウォーク」を町全体で盛り上げまして、町民全員で頂けた賞をさらなる活性化につなげていきたいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。

愛知県設楽町 | 田峰観音奉納歌舞伎 谷高座

青い目の人形を介した草の根国際交流

田峰観音奉納歌舞伎 谷高座 座長 原田 利一

私たちも昨日、総務大臣賞をいただきました。皆様どうもありがとうございました。

ただいまから田峰観音奉納歌舞伎谷高座の活動内容を報告させていただきます。

最初に「問われず 名乗るも おこがましいが 生まれは三州田峯の在、15の歳より、親に離れ 身のなりわいも、設楽の役場、谷高座、座長の はーらーだー とーしーかずー。」…というわけで、私は谷高座座長を仰せつかっております、原田利一と申します。よろしく願いいたします。

スライドは今年二月の田峰観音大祭に奉納された子供歌舞伎の一場面であります。谷高座は一言で言ってしまうと、田峰観音のお祭りに歌舞伎を奉納する素人の歌舞伎集団であります。スライドは観音様を正面から、境内の方から見たものであります。

右側に写る茅葺屋根の建物が、歌舞伎を奉納する歌舞伎舞臺で、舞臺の名称が「谷高座」となっております。私たちのグループの名前もこの舞臺「谷高座」からとったものであります。

田峰観音の奉納歌舞伎は350年以上続いていると言われておりますが、この奉納には次のような伝承があります。

田峯城の城主である田峯菅沼氏の菩提寺であるお寺が、徳川三代家光の時代に焼けてしまいました。村人は寺再建のため、田峯の村の山がある段戸でその用材を調達して、日光寺を再建いたしました。ところが村所有の山と思っていたところが実は天領であり、田峯の村に盗伐の疑いがかけられ、夏の土用に代官が検分にやってくることになりました。このままでは村人全員が捕縛されてしまいます。困った村人は観音堂に籠もり「もしこの危難を救ってくれたなら、観音様のお祭りには観音様の大好きな歌舞伎を村が3軒になるまで奉納します。」と願を掛けました。代官の検分の日、夏の土用というのに段戸の山には大雪が降って「このような寒いところに盗伐に来るはずがない。」と、村人は救われました。以後、途切れることなく戦時中も奉納歌舞伎は続けられてきました。このような伝承により奉納歌舞伎は継続

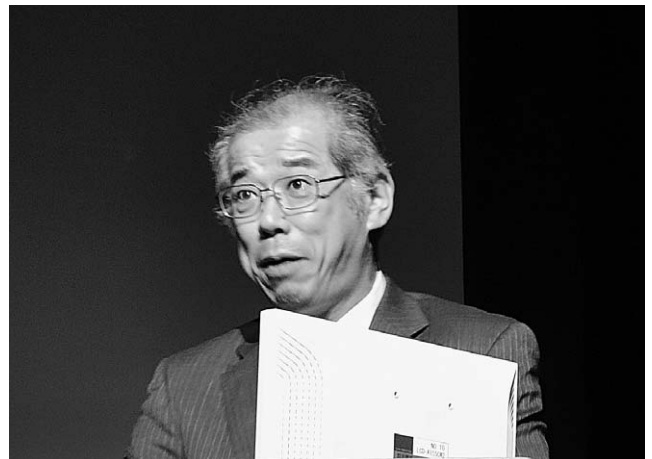
されています。

これは田峯小学校です。全校児童14名の超小規模校であります。この学校には、青い目の人形が保存され、後程説明させていただきますアメリカ訪問へと発展していきます。

田峯地域の航空写真であります。スライドの上の方に出てくる宅地について後程説明させていただきます。

谷高座の活動は、田峰観音と田峯小学校を中心に行われております。

さて、ここからのスライドで奉納歌舞伎の紹介をさせていただきます。田峯地域は年が明けるとお祭りモードに入ります。まず、歌舞伎の観客席となる小屋作りが行われます。通常、2月12日の、お祭りの2週間前の日曜日に地域総出でこの小屋掛けは行われます。小屋掛けは丸太と青竹、荒縄だけを使って組み立てられます。昭和の時代は、小屋掛けが行われる当日の朝、柱を立てる穴掘りから始めました。ですがだんだん、高齢化と人手不足によって、事前に「芝居委員」と呼ばれる役員の方々が基礎の部分、観客席の部分を組み立てておきます。青竹約140本を使って屋根の部分を作っていきます。四方から差し出された青竹を、荒縄を使って垣根結びで固定していきます。写真の右下に見える太い丸太がありますが、これは「跳ね木」といって、後方と左右からそれぞれ二本ずつ合計六本の檜で屋根全体を吊り上げています。これが完成写真です。観客席となる小屋の骨組みが出来上がりました。奉納歌舞伎当日の朝、この骨組み全体をシートで覆うと小屋の完成となります。昭和30年代はシートではなくて菰で全体を覆っていたそうですが、私にはその記憶は残っておりません。祭り当日の小屋はシートで覆った後、寒さよけのザラ板とカーペットを敷き終わるのを待ち受けたお母さんや一般の見物の方々が、我先にと座布団だとか



毛布を手に座席の確保に走る姿は圧巻であります。ちなみにこの小屋掛けの技術は、設楽町の選定技術に指定されております。

いよいよ奉納歌舞伎の始まりです。第一幕はここ30年来「寿式三番叟」、田峯では「寿浄瑠璃三番叟」といって、必ず初幕に三番叟を出しています。この三番叟では面箱持ちとして、4月に新たに田峯小学校に入学する保育園児をお披露目して、歌舞伎デビューを果たしてもらっています。これは、今年2月の奉納歌舞伎の写真で、1年生から3年生による「白浪五人男」です。通常の番傘では重たくて持っていることができませんでしたので、少し反則ではありますが、舞踊用の軽い傘で代用させていただきました。低学年の台詞とは思えないしっかりした七五調の台詞回しに、私やお母さん方はみんな目頭をタオルで押さえておりました。これは、最初のスライドで紹介した高学年の舞台です。「寿曾我対面」の幕切れの場面です。

今年は、アメリカ訪問直後の奉納歌舞伎でしたので、小学生による劇中口上、一番右側に立っている男の子ですけれども、「一座高うございますのが口上をもってご挨拶申し上げ奉ります。」と児童会長が、アメリカでの体験記と皆様からのご支援に対するお礼を、劇中で、口上で、お礼を行いました。大人の歌舞伎の様子です。谷高座として挑戦した歌舞伎の数は、数えたことはいないのですけれども、おそらく30や40は優に超えていると思います。これも子供歌舞伎「曾我対面」の一場面です。近年は舞台も非常にきれいになったとお褒めの言葉をいただいております。

現在、座員は、上は60歳から下は小学校1年生まで約40名おります。昭和50年頃の話では、座員も少なく、一人の座員がほとんどの芝居に参加し、一人五役も六役も務める時代があったそうであります。高度経済成長期は田舎から都会へと若者を誘いました。歌舞伎を演ずる若者がどんどん減少して、一人が何役も務めなければ奉納歌舞伎を維持することができなくなりました。この危難を救うために行ったのが子供歌舞伎の導入であります。昭和52年の祭りから子供歌舞伎が始まりました。昭和52年から始まった子供歌舞伎は、当初は小学生の全員が参加したのではありませんでした。5・6年生が一幕を受け持って、大人の負担を減らしてくれました。平成の時代に入り児童数が減少してくると、5・6年生だけでなく全校児童により二幕が演じられるようになってきました。同じような写真で恐縮ですが、

今年の高学年の歌舞伎は先程から申し上げているように「曾我の対面」でありましたけれども、主役を演じる小学生に対し、舞台二重に居並ぶ大名は、学校の先生方です。子供の引き立て役として最高の上手な台詞回しでありました。あくまで引き立て役として上手でありました。これは楽屋の様子であります。化粧を済ませて緊張しながら出番を待っています。子供歌舞伎に全校児童が参加すること、このこと自体は素晴らしいことなのですが、全児童はたった二幕に出演できてしまう、これは一体どういうことなのでしょう。そうです、児童数の減少、小学校の存亡の危機でもありました。田峯小学校の児童は、昭和32年には123人、42年に65人、52年に23人、62年に18人と激減いたしました。昭和60年頃の設楽町では、田峯小学校も含めた近隣の小学校4校で新設校を開校するという計画になっておりました。田峯地域では、小学校を地域文化やコミュニティの拠点として考える人が多くいたため、設楽町の学校統合計画には賛成できませんでした。

田峯地域ではこの打開策として、当時のPTAが中心となって、児童数を増やし、小学校を存続させるため、地域全体の取組として独自の宅地開発をすることが決められました。小学校近くの山林を購入し、宅地を開発する計画です。小さな集落でありますので、谷高座の座員も、PTAもすべて同じメンバーであります。資金は地域の財産区のバックアップと、不足するところは個人の借り入れで賄いました。平成10年8月に準備委員会を立ち上げ、地域の理解を取り付けました。同年の12月に「田峯21世紀委員会」を立ち上げて、宅地開発に取り組みました。各種手続きを経て平成12年7月に造成工事が始まりました。山が切り取られて宅地が姿を現してきました。できるだけ安価な宅地提供を目指したため、業者に丸投げするのではなく、当時のPTAは土曜日曜日、すべて作業の連続でした。造成前の立木調査に始まって、境界の立ち会い、竹林の伐採、側溝の溝蓋設置、排水設備のU字溝設置など、経費を抑えるためにできる作業はすべて自前で行いました。17区画を造成し、14区画を売却できて、13区画に住宅が建っております。

ここからはアメリカ公演の話になります。皆さん、この人形をご存知でしょうか。昭和2年にアメリカ合衆国から平和の使者として贈られた「青い目の人形」であります。約1万2千体が日本に送られてきましたけれども、不幸な時代に敵国の人形として、その多くが

焼かれてしまいました。現存するのは日本全体で270体くらいとかがっています。愛知県には9体が現存しているのが確認されております。田峯小学校にはそのうちの1体、写真のグレース・A・グリーンが、右側に写るパスポートと一緒に大切に保管されておりました。

田峯小学校と田峯地域では、昭和63年に地域を挙げてグレースの還暦祝いを行いました。その席上、グレースの里帰りが話題となって、話はとんとん拍子に進んで、平成2年正月に第一回目の「青い目の人形里帰り訪問団」が結成され、グレースの里帰り、日本文化紹介としての歌舞伎公演が実現いたしました。平成2年の第一回目から回を重ねて、今年の1月に第8回目の人形の里帰りと歌舞伎公演を行いました。第6回目の訪問から今回の訪問までお世話になっている、シカゴ市の近郊にあるアーリントンハイツのウィンザー小学校との交流の様子であります。ここでは田峯地域を紹介したり、日本の伝統的な遊びである、折り紙だとかメンコ、コマ回しなどを教えたり、アメリカの授業に参加したりして、交流を続けております。子供も教員もホームステイで、より親密な交流を深めております。

このアメリカ訪問は、谷高座として日本文化紹介としての歌舞伎公演、田峯小学校として学校間交流ですとかグレースの里帰り、この三つが大きな柱としてあります。写真は先程ビデオで見ていただいた通りなのですが、アーリントンハイツのサウス中学校のランチルームをお借りしてやったもので、「車引き」というものであります。この日は、大雪が降りまして満員盛況とはいきませんでしたけれども、シカゴ総領事をはじめ多くの方が観劇に訪れてくださいました。現地では、より交流を深めたり、より日本文化を理解していただくために、都合がつく限りアメリカの子供たちも歌舞伎に参加していただいております。今年も、先程のビデオで最初に写った四人がそうでありますけれども、この子供たちが出る関係でしょうか、歌舞伎が終わると大きな拍手と共に、参加者の家族やホームステイ先の人たちが舞台に上がっての記念撮影で舞台上はごった返します。

子供歌舞伎と一緒にいった大人の「吉野山」の場面であります。今回は二回、公演を行いました。サウス中学校に続き行ったのは、サウス中学校から数百キロ離れた、イリノイ大学のクラナートセンターというところでありました。谷高座としましてはクラナートセンターへは二度目の訪問です。ここは全米でもトップクラスの劇場で、専門のスタッフによる本格的な舞台進行

が行われました。写真はドライリハーサルや化粧風景の公開の様子です。田峯小学校は、アメリカを訪問するだけでなく、アメリカの小学生を受け入れる交流も行ってきました。アメリカの小学生が田峯を訪れた時は、習字の授業に参加してもらったり、川で泳いだり、花火大会を催したりと、地域を挙げて歓待しました。初期の交流校のラスキン小学校は、すでに廃校になってしまっていて、その後の交流を続ける学校の日本訪問はまだ実現しておりませんが、田峯小学校や谷高座の交流が取り持つ縁で、設楽町の中学3年生は毎年全員がアーリントンハイツを訪問して、ホームステイしながら現地の中学生と交流を行っており、最近では毎年アーリントンハイツの中学生が設楽町を訪問するようになっております。

この写真は少し古いものになりますが、平成3年2月に、イリノイ大学の学生による「イリノイ歌舞伎」が、名古屋と東京の公演の合間に、田峯の奉納歌舞伎の日程に合わせて谷高座に参加したものであります。300年来の奉納歌舞伎の歴史の中で初めて青い目の役者が歌舞伎を奉納しました。観音様もびっくりしたことと思っております。大学生がスタッフを含め全員、田峯にホームステイをしました。私の家に泊まった学生も二人いたのですが、二人とも2メートル以上もありまして、布団と炬燵を繋いで両側に寝ていただきました。

今までのアメリカ訪問の軌跡であります。平成5年の第2回が、夏8月に行われた以外は、7回とも1月に行っております。この軌跡にありますように、第1回から4回までがオハイオ州デイトン市のラスキン小学校を中心に交流を続けました。第5回目は西海岸のフォートブラック市。このデーナグレー小学校というのがフォートブラックにある学校ですけれども、第6回目か



ら今回の8回目までがアーリントンハイツのウィンザー小学校を中心に交流が進められております。

先程申しました全米でもトップクラスのクラナートセンターで2回、アメリカの三大美術館といわれるシカゴ美術館で3回ほど公演をさせていただきました。子供歌舞伎でアメリカ公演を経験した若者座員が増えてきました。アメリカ公演を経験した全員が全員、田峯地域に残るわけではありません。学校を卒業し、都会で就職する子供たちが断然多いことには変わりはありませんけれども、小学生のうちにアメリカでの歌舞伎公演だとかホームステイを経験したことは、小学生たちにとって必ずや、少なからず、よい影響があったと信じております。

中山間地域において、無形民俗文化財や伝統芸能と言われる地域文化を継承していくことは、全国的に困難な時代となってきております。都会の人たちに応援を求めて実施したり、中断あるいは中止してしまうのも選

択肢の一つであろうかとも思います。しかしながら、やめてしまうことはいつでもできます。田峯地域は、村が三軒になるまで観音様に歌舞伎を奉納することを約束しておりますので、やめることはできません。それは冗談ではありますが、地域一丸となって頑張っていればその道は見えてくると思っております。田峯地域は90戸、300人にも満たない高齢化した小さな集落でありますけれども、田峰観音、田峯小学校を中心に田楽、歌舞伎、念仏踊りなど民俗芸能が数多く伝承されるとともに、田峯城や民俗芸能に由来する有形無形の文化遺産が数多く残されております。これらを上手に活用して、また下流地域住民との共同により景観保全を図り、交流人口の増加、あるいは移住・定住に結びつく活動を積極的に展開してまいりたいと考えております。

皆様の積極的なご支援をお願いして、本日の事例発表を終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。